

# 保育者養成校における音づくりの実践

～幼稚園教育要領における「音」への考察～

Play of Making Sound in Nurturing Childcare Workers :  
a Study of “Sound” in the Course of Study for Kindergarten

芹澤美奈子、山口亜弥子

Minako SERIZAWA, Ayako YAMAGUCHI

## 第1章 はじめに

我々は、鶴見大学短期大学部保育科において、1年生の必修科目である「音楽表現」を通年で担当している。

担当するクラスの学生たちの音楽経験はさまざまで、全く経験がない、という学生もいれば、クラブ活動で音楽に携わっていた、ピアノをずっと習っている、などという学生もいる。しかしながら、クラスの3分の1から2分の1くらいが音楽経験のほとんどないいわゆる「初心者」の学生である。

入学時、学生の音楽経験歴のアンケートを取るが、その中の「音楽に対してどのようなイメージがあるか」という質問に対し、「苦手」と答える学生が少なくない。ピアノ演奏や歌唱などの実技に苦手意識をもっている学生が多く、そのことを不安視する学生が多い。

そのようなさまざまなバックグラウンドを持つ学生たちを、保育者養成校として育てていかなければならない。

では、どのような授業、活動を通して、彼らの「表現」の力を育てていけばよいのか。

## 第2章 幼稚園教育要領における領域「表現」の考え方

音を扱う上で重視しなければならないことは「音は時間の経過とともに消えてなくなってしまうこと」である。子どもの表出や表現に、保育者としてすぐに気づかなければ、それは消えてなくなってしまう。すなわち、子どもの心の動きを見逃してしまうのである。

ここで、現在の幼稚園教育要領の領域「表現」を俯瞰したい。

### 領域「表現」

#### 1 ねらい

- (1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。
- (2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
- (3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

#### 2 内容

- (1) 生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。
- (2) 生活のなかで美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。
- (3) 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。
- (4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。
- (5) いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。
- (6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。
- (7) かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。
- (8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。  
(下線は筆者が記述。)<sup>1)</sup>

この内容を見てもわかるように、領域「表現」においては、「音楽」ではなく、「音」という言葉が繰り返し使われている。

尚、現行の幼稚園教育要領は、2017年に告示されたが、この改訂の際、内容の取扱い(1)において、ある一文が加えられている。

#### 3 内容の取扱い

- (1) 豊かな感性は、身近な環境と十分に関わる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに会い、そこから得た感動を、他の幼児や教師と共有し、様々な表現することなどを通して養われるようにすること。その際、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること。  
(下線部分が新しく加えられた一文、下線は筆者が記述。)<sup>2)</sup>

〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見2-1-3 鶴見大学短期大学部保育科

Department of Early Childhood Care and Education, Tsurumi University of Junior College, 2-1-3 Tsurumi, Tsurumi-ku, Yokohama 230-8501, Japan.

これらを読み取ると、教育要領においては、「音楽」という完成された芸術ではなく、子どもにとって身近な、身の回りにある「音」を楽しむ経験を重視する姿勢がうかがえる。しかし、前述の通り、音楽に苦手意識を持つ多くの学生は、その「音楽」という完成された芸術のみをイメージしており、この教育要領でうたっているような「身近な、身の回りにある音」というもの、また、素材としての「音」に気付いていない、もしくは気にかけていないのではないだろうか。

そこで、学生にとっての「身近な音について」知るため、考察を試みた。

### 第3章 音を聴く・探す

子どもは、日々の生活の中で、風や雨の音、動物の鳴き声など、様々な音を聴き、身体で感じている。既成の音楽だけが子どもにとっての「音楽」ではなく、日常の中で出会う様々な音の蓄積が子どもの表現の基盤になっていると考える。

現在、保育施設では、一斉指導の中で保育者が主導になって音楽活動を行うことが少なくない。その一方で、自由遊びの中で子どもたちは様々な音体験をしている。例えば、バケツを太鼓代わりにして「カンカンカン」と言いながら、言葉に合わせて繰り返して叩いて遊んだり、砂場で空の牛乳パックに砂を入れ、振りながらその音にじっと耳を澄ましたりする姿などがある。子どもたちは楽器だけではなく、日々身の周りにある様々な音に出会い、遊んでいるといえる。

また、子どもたちは保育者や友達とのやり取りの中で、自分のイメージや思いを音や声、身体の動きを取り混ぜて未分化なままに表現している。

では、その子どもたちの自発的な音楽表現はどのような形で表れるのか。保育者はその表出をどのように見ていくのか。子どもたちの音楽表現に気づき、受け止め、導いていく保育者の役割について、さらに考察を深めたい。

### 第4章 先行研究

子どもの表現、あるいは学生の表現を考える切り口として二人の人物を挙げる。

カール・オルフ (Carl Orff 1895—1982) は、即興表現を重んじた教育を理念として、子ども自ら考え、自分で音楽を作り出していく力を育てることを重視している。音・身体の動き・言葉が一体となって表現され、時にそれらは単独でも表現されると考えている。それをオルフは「エレメンタールな音楽」という言葉を用いて説明している。エレメンタールとは、「構成の素材であり、根本的なものであり、出発点をなすもの」<sup>3)</sup>と書かれており、人間が受け身で音楽と関わるのではなく、自らの手で生み出すものと考えている。

また、子どもの音楽は、言葉を出発点として、それは日常生活言語である、この「土地の言葉」でなければならぬと考えられている。それがリズムや抑揚がつくことで、音楽になると考えられている。つまり、オルフは言葉によ

るリズムカルな表現や、日本ではわらべうたの音階を表現の出発点と捉えていると考えることができる。

また、「オルフ楽器」は、①音色の美しいもの②奏法が簡単なもの③丈夫なもの、と定義づけられており、幼い頃から綺麗な音に耳を澄ませ、発見させ、良い耳を育てていくことが提唱されている。

マリー・シェーファー (Raymondo Marry Schafer 1933—2021) は、「音」(Sound)と「～の眺め・風景」(Landscape)を組み合わせた、音の風景 (Soundscape) という言葉を生み出した。

サウンドスケープとは、自分自身の身体を通して、日々生活の中で周囲の世界をどのように感じるのか、また、それぞれの空間をどのように読み込み、その環境をどのようにとらえるか、ということである。シェーファーは、「どんな先生もできる最上のことは、生徒の心にある事柄の火種をうえつけることだ。音楽の発見に夢中にさせること、楽器を弾けたり、音符が読めることよりも優先させてきた。」<sup>4)</sup>と述べている。

「Ⅰ. 創造的可能性を持つ子どもたちが自分たちの音楽を作るために必要なものすべてを発見しようとする。」

「Ⅱ. あらゆる年齢層の生徒に環境音を紹介すること、楽器の音風景を、人間を主要作曲家とする音楽作品としてとりあつかい、その改善に役立つかも知れない批判的判断を下すこと。」

「Ⅲ. あらゆる芸術がそこであい、調和の中で発展できるような結節点、あるいは中心点を発見すること。」<sup>5)</sup>

これらのことから、シェーファーは生活の中で聞こえる様々な音に気付くことを大切に、自分で音を発見し、自分の思いを音・音楽で自由に表現することを重んじていたと考える。二人の理念から共通して、既成の音楽や音を使って表現することだけが、音楽表現ではなく、日常生活のなかの子どもの素朴な表現が音楽表現の基盤になると考える。

つまり、幼稚園教育要領の「表現」をとらえるにあたって、大きな示唆を与えてくれるといえるだろう。

シェーファーは、サウンドスケープを提唱した時、「忘れかけていた自分たちの音の風景、生活における豊かな音の文化を思い出すことができるようになる。」<sup>6)</sup>と述べている。このことから、音に気付く感性が失われていることを危惧していたことが読み取れる。

では、保育者養成校においては、どのように音を聴き、表すことができるように導いたらよいのであろうか。

### 第5章 「音づくり」の実践・分析方法及び活動の流れ

学生が「身近な音」に気づき、発見し、音を自ら作り、そこからさらに想像を膨らませていく活動を行った。

対象学生：1年生114名

学生にとって身近にある素材をもとに音を作り出し、その音に対してどのようなイメージを持つのか。そして、その課題に取り組むことで、またその体験を通してどのような感想を持つのかを分析する。

- ① 授業を行い、学生の課題を回収
- ② それらを音の素材・名づけた音の名前、とそれぞれを種類別に分類し、どの種類の音が多いのか統計を取り分析。学生がその活動を通してどのような気付きを得たのか、その感想をまとめ、考察し、保育者養成校としての今後の課題を見つける。

この授業は、昨年度のコロナ禍の時期であったため、オンデマンドで行った。

オンデマンド授業では、前述した幼稚園教育要領の部分を取り上げながら、子どもがどのように音に出会い、音楽活動を始めていくのかということの説明をした。その講義動画を視聴後、学生各々で、音を探し、音を作る活動をする。そして、その自身が作った音はどのように聞こえるのか、どのように友達に紹介するのか、名前をつける。そして最後にその音探し・音づくりを行った感想をまとめるという流れである。

## 第6章 分析結果

まずは学生たちが音づくりの素材として何を使ったのか。表の通り、分類した。(参考資料 表1)

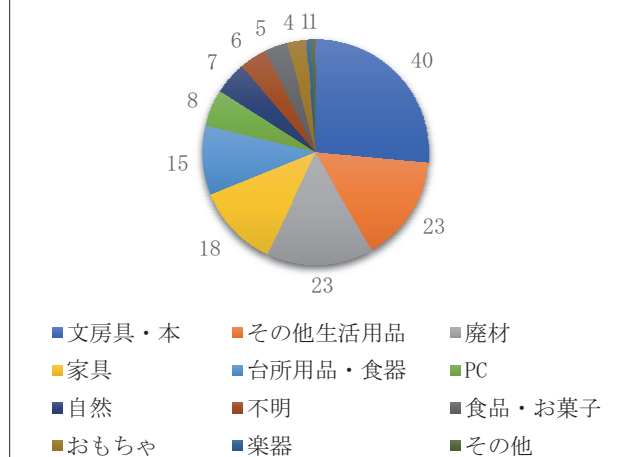
文房具・本、その他生活用品、廃材、家具、台所用品・食器、PC・スマートフォンなどの電子機器類、自然、食品・お菓子、おもちゃ、楽器に分けた。この場合の楽器は、本来の使い方ではない使い方、素材としての音—電源をオフにした状態での鍵盤のカタカタする音—、その他にボイスパーカッションと分けた。それらの分類のもと、統計を取った。(参考資料 グラフ1)

音づくり素材分類

種類	人数
文房具・本	40
その他生活用品	23
廃材	23
家具	18
台所用品・食器	15
PC	8
自然	7
不明	6
食品・お菓子	5
おもちゃ	4
楽器	1
その他	1

(参考資料 表1)

音作り素材



(参考資料 グラフ1)

複数音作りした学生もあり、それぞれ1つとしてカウントした。それゆえに総数は学生114名より多くなっている。課題の提出方法として、音源もしくは動画、という形を取ったため、音源を提出した学生で特に素材の説明のなかったものは不明、とした。

遠隔授業でこの内容を扱ったせいか、机の周りのものの音に耳を傾けた学生が多いように見受けられた。課題を与えた側としては、遠隔授業だからこそ、一つの場所にとらわれずにあちらこちらを探してみれば、と授業動画の中でも声掛けをしていたのだが、ほとんどの学生が室内において音探しをしていた。

次に名付けた音の分類である。こちらも表の通りに分類した。(参考資料 表2)

生活音(屋外)、生活音(屋内)、自然、動物、季節の音、楽器、擬音語、感情、その他と分けた。

課題を出したのが6月であったが、夏をイメージする名前もいくつかあったので、「季節の音」として分類した。また、実在しないものなどはその他に分類し、特に名前がないものは「イメージなし」とした。

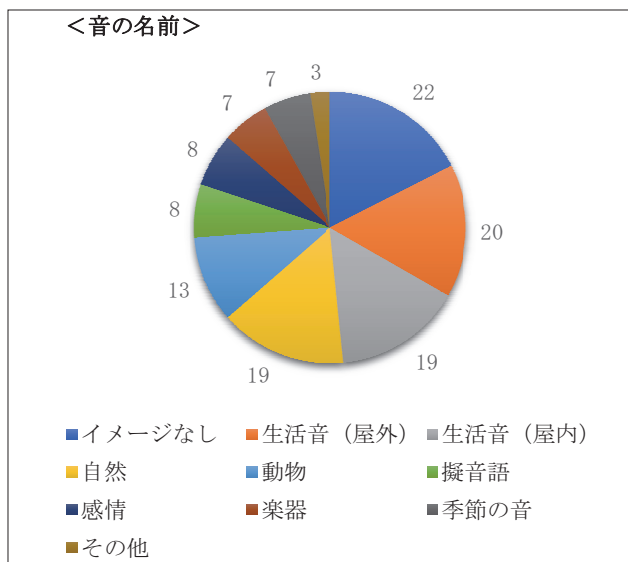
こちらも音づくりの素材同様、統計をとった。

(参考資料 グラフ2)

音に名前

種類	人数
イメージなし	22
生活音(野外)	20
生活音(屋内)	19
自然	19
動物	13
擬音語	8
感情	8
楽器	7
季節の音	7
その他	3

(参考資料 表2)



(参考資料 グラフ2)

音に名前をつけるのが難しかったようで、名前をつけられない、イメージがわからないという学生が多くいた。また、生活音は、屋外・屋内と合わせると全体の3割程度と、多く見られた。

音を見つけた子どもたちが、そこからどう音遊びを開展させていくのかということを学生自身に体験させるために、音探だけでなく、音作りして名前をつけるという課題を出したが、音を探すだけで終わってしまった学生も一定数いたことが判明した。

## 第7章 結果と考察

- ① 多くの学生にとって、身近な音は生活音である。  
多くの学生にとって、特に自然界の音はあまり身近ではなく、音の出る素材も、そこからイメージするものも、生活音であった学生が多数いた。
- ② 遠隔授業だからこそ、個人の活動に力の差が出た。  
複数音作りをする学生もいれば、机の前から一步も動かずに課題に取り組んだのであろうと思われる学生もいた。
- ③ 学生にとって自然の音に触れる機会がなく、また音で遊ぶ経験や発想が少ない。  
音遊びにまで発展出来ず、苦勞する学生も一定数いた。また、特に、遠隔授業における課題であったせいか、屋内において課題に取り組んだ学生が多く、特に机の周りのもので音探しをした学生が多くいた。
- ④ 課題を難しく考えたのか、課題未提出者が多かった。  
同じ時期に遠隔授業で行った音楽表現の様々な課題、例えば、コードのアレンジ、楽典、手遊びなどの課題がある中で、この回の課題は他のものと比べて回収率の低く、全体の1割が未提出であった。
- ⑤ この授業の体験から保育者としての展望をもった学生が多くいた。  
この課題を通しての気づきを、今後に生かしたいとポジティブな感想を持った学生が多くいた。

- ⑥ 音の名前を自然物にした学生は、考察が深く、気づきが多い傾向にあった  
音の名前を自然物にするような学生は、想像力が豊かで視野が広く、その分、気づきが多い傾向にあった。

ここで、もう一度、2017年に教育要領の際に加わった一文をみしてみる。なぜ、この一文が加わったのであろうか。

「その際、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること。」

これは、テレビやスマートフォンのゲームなどで遊ぶ時間が増え、戸外で遊ぶ時間が減るなどの子どもたちの環境の変化、また、子どもたち側だけでなく、保育者も自然の音に触れる機会が少なくなっているということを危惧しているからでないだろうか。

## 第8章 今後の課題・まとめ

### 1. 子どもたちの結果との比較・分析

今回は、学生にとっての身近な音について研究をした。今後は、子どもたちにとっての「身近な音」についても研究し、学生たちの結果と比較・分析をしたい。子どもたちの「身近な音」と保育者を目指す学生たちの「身近な音」と、解離があるのかなのか。そこからまた改めて教育要領に加えられた一文について考察していきたい。

### 2. 保育者として、素朴な音に気付ける豊かな感性を保育者養成校として育てていきたい。

そもそも、今回の「音作り」課題のねらいは「音遊びの体験」であった。しかし、実際遊び方が分からず、戸惑う学生が多くいたように見受けられた。まずは「音」というものが取り入れられるような、身の周りの音に耳を澄ませられるような活動、それらに関心を持てるような授業の工夫を今後も考えていくことが必要であることが明らかとなった。

### 3. 自然の音を身近にするための工夫

自然の音を身近にするための授業の工夫をしていきたい。学生にとって、「自然」が身近になるように、生活音だけではなく、自然界の音にも耳が傾けられるような、そのような気づきを持てるような授業の工夫を今後も研究していきたいと考える。

### 4. まとめ

保育者自身が豊かな感性を持つことで、その場で子どもの「音の経験」に気づき、受容する、子どもの素朴で些細な発見・表出・表現に気づき、受け止めることで、子どものさらなる表現を導くことにつながるのである。

## 【引用・参考文献】

- 1) 「幼稚園教育要領」 pp.20-21 文部科学省 2017年
- 2) 同上 p.21
- 3) 「カール・オルフ博士を迎えてーこどもはリズムに生

きる」p.6 NHK 編 1962年

- 4) R. Marry Schafer 高橋悠治訳『教室の犀』p.10 全音楽譜 1995年
- 5) 同上 p.4
- 6) R. Marry Schafer 鳥越けい子 若尾 裕 今田匡彦訳『A Sound Education』p.169 春秋社 2009年

※この論文は日本音楽教育学会 第52回京都大会における口頭発表の内容を加筆修正したものである。